

けて大破、着底状態で終戦を迎えている。

## 特殊潜航艇「甲標的」の思い出

広島県 大久保 巧

私は昭和十七（一九四二）年五月一日、呉海兵団・大竹に入団、三カ月の機関科教育を受け空母「瑞鶴」に乘組みとなりました。

空母「瑞鶴」は昭和十六年九月に竣工した新鋭空母で、竣工と同時に真珠湾攻撃に出撃、昭和十七年前半はインド洋作戦、続いて珊瑚海海戦に参加していますが、この珊瑚海海戦では僚艦「翔鶴」は米艦載機の雷撃爆撃を受けて飛行甲板などが破損するなどの被害を受けています。

そして昭和十七年七月機動部隊として第三艦隊が編成され、「瑞鶴」は他の空母と共に第一航空戦隊を編成、私が乗艦したところは第二次ソロモン海戦を控えていた時期でした。

その海戦を終えてトラック島に帰港したのは翌年一月、その後私は横須賀海軍工機学校（電気術）、

大竹潜水学校（蓄電池）などを卒業しました。

大竹の潜水学校では流行性脳脊髄膜炎に罹り呉海軍病院に入院しましたが、家へは危篤の電報がゆく、病室が隔離され、ドアを開けるとそこには棺桶が置かれている、などひと騒ぎがありました。三カ月入院して良くなり、補充兵として呉の海兵团に一カ月半ぐらいいますと、分隊長から「転勤命令が出ている。しかも鎮守府長官名で出ている」ということで、良く聞きますと、第六艦隊司令部付山田事務所へ転勤命令でした。

そして行く先は工廠で聞いてみる、というので潜水艦部へ行き、棧橋で待っていますと内火艇で迎えられました。かくして私の特殊潜航艇「甲標的」での訓練が始まりました。

その前に日本の特殊潜航艇の開発の経過を少し申し上げます。古くは昭和六年、日本独自の兵器・戦法を考えるべきだという気運の中で、艦政本部第一部第二課を中心に多くの提案がなされましたが、その中の一つとして「魚雷肉攻案」という案

が海軍予備大佐横尾敬義氏より提案されています。これは魚雷を人間が抱いて敵艦に必中を期するというもので、前記艦政本部では興味を示し、文献等の実例等の調査を開始しております。

しかし日本海軍の伝統では必死兵器の採用は出来ないといいことから、いっそのこと、魚雷搭載の潜航艇を操縦し、安全圏内で魚雷を発射するという発想に転換をしたといわれています。

艦政本部第一部第二課長に就任した第一水雷戦隊旗艦巡洋艦「川内」の艦長を勤めていた岸本鹿子治大佐は、その潜航艇の開発に取り掛かり、翌七年、一応の設計が出来上がり、模型実験が航空廠の水槽で行われました。まずまずの実験結果であったといわれていますが、この結果を基に朝熊中佐が設計を練り直し、上申途中で握りつぶされることを避けるため、当時の軍令部総長伏見宮博恭王元帥に直訴することとなったといえます。

このようなことを経過して、幾つかの試作艇が作られ、第二次試作艇の実験が行われた昭和十五

年八月の二カ月後に、正式採用前に十基（第三十二号艇）の製造の訓令が出されたといえます。

当時、母艦一隻の搭載は十二基でしたので、すぐに母艦二隻分の二十四基の製造に訓令が変更されました。そして昭和十五年十一月十五日、この特殊潜航艇は兵器として正式採用となり、「甲標的」と命名されることとなったのです。

この「甲標的」の製造・量産は急がれましたが、呉海軍工廠では戦艦「大和」の建造途中であり、同工廠の使用は不可能であったため「離れ小島量産案」により、鳥小島の水雷部軍機工場で量産が開始されることとなりました。

並行して搭乗員の養成も急がれ、同時に第一期講習が発令され、同日付で最初の搭乗員として岩佐直治中尉と秋枝三郎少尉が甲標的母艦「千代田」の乗組を命ぜられ、工廠の魚雷実験室で座学と操縦訓練とが開始されました。

昭和十六年一月十日に改装を終えた甲標的母艦「千代田」は艦隊に編入され、艦長原田覚大佐は、

この訓練に多大の貢献をされ、二月より発進訓練などの猛訓練が開始されました。

四月には第二期講習員として士官十人、下士官十二人が「千代田」に着任、呉海軍航空隊沖合の鳥小島を基地として座学、机上演習が工廠の魚雷実験部機密室、呉海軍潜水学校でも行われることとなりました。さらに五月より曳船「呉丸」による操縦訓練、「甲標的」の操縦訓練が愛媛県三机湾で始まりました。

その後、訓練と講習、洋上襲撃訓練などが行われてきたのですが、九月に「甲標的」の海中から揚収することに成功して「甲標的港湾襲撃案」が浮上し、山本連合艦隊司令長官は真珠湾攻撃に使用することを承認されたことなどがありました。

すでに「甲標的」の搭乗員は、宿毛湾北方の平城湾で夜間碇泊艦攻撃訓練を行っており、連合艦隊旗艦「長門」艦上では真珠湾攻撃の図上演習も行われるようになりました。

一方「甲標的」の制式採用と量産のため倉橋島

の広湾に面する大浦崎に「P基地」と称された量産・整備・訓練の基地が新設されました。

実際には「P基地」での量産が開始されたのは昭和十七年の秋からでした。「甲標的」の量産は、第二十号艇までは鳥小島の水雷部軍機工場で行われ、それ以降は「P基地」での量産が開始され、この「P基地」では搭乗員の教育・訓練も行われ、大浦崎南方の亀ヶ首射場を含む大迫地区には、水陸両用戦車「特二式内火艇」の「Q基地」が新設されるなど、この倉橋島東部一帯は海軍秘密基地となったのです。

昭和十九年七月、今まで影の部隊として活躍していた「特潜部隊」は「第一特別基地隊」として改編されました。これは特攻作戦が開始されたレイテ沖海戦で水上艦艇部隊が壊滅したために、特潜部隊は主力部隊として整備され、本土決戦用に温存されることになったのです。ただ沖繩には制式兵器に制定以前の「甲標的丁型」が整備され、沖繩決戦に投入されています。

「甲標的」の初陣はハワイ作戦です。ハワイ作戦が終わり、早くもシドニー、ディエゴスアレスへの第二次攻撃隊が検討され初め、昭和十七年には、この攻撃に参加する「甲標的」九機が空圧式より油圧式燥舵機に改良され、下部ハッチと水中聴音機を追加し、新型の防潜網切断機が新設されています。

実際に搭乗員は艇長のほか船員四人の五人で、この組合わせを我々は「縁組」と称していました。が、私は直井時雄海軍中尉を艇長とする第六〇五号艇の一員として縁組され、寝食を共にしました。艇は玉野の三井造船所で艤装することとなりました。造船所の一隅が仕切られて特に標的の建造にあてられていましたが、艇員たち五人で行きますとすでに整備員の手により外郭は出来上がっていました。宿舎は高級社員用のものなのであるうか、りっぱなホテルのような豪華な部屋が与えられた。もちろん、この艤装の建物へ入るには軍令部の許可証が必要で、出入口は四十センチ幅ほど

のもので衛兵が二人立哨していました。

こうして艇が完成しました。整備長による耐圧試験を終え、玉野の岸壁を離れました。玉野での艀装艇は数隻で我々の「六〇五」と市原艇長の「六〇六」の数字が艇に白く書かれ、菊水のマークが描かれていました。我々は造船所長から贈られた「轟沈」とかかれた日の丸の鉢巻きをしめて、五メートルもある白いマフラーを頸に巻き、皮の手袋に搭乗服である飛行服・半長靴を履き、操舵の一人が艇内にいるだけで、あとは艇上に並び、岸壁に溢れる工場関係者の帽を振っての見送りのなかを静かにすべりだしました。

次の訓練基地は小豆島で、六月に小豆島から大浦に回航すると、直ちに六月二十日付で第一〇二突撃隊付を命ぜられました。そして艇の整備をすませて佐伯湾の松浦に向いました。

静かな入江が尽きるところに点在していた民家のなかの一軒の家が本部でした。我々は艇をブイに繋いで上陸、本部に行くと、広い土間のつづき

に天井の高い涼しそうな畳の部屋があり、その床柱を背にシャツ姿の中老の男が団扇を使いながらあぐらをかいていました。この人が第一〇二突撃隊司令で、艇長が「直井中尉他一〇二突撃隊付を命ぜられ、ただ今着任しました」と挨拶、こうして第一〇二突撃隊司令殿塚謹三大佐とはその後終戦まで寝食を共にすることになったのですが、司令は歴戦の潜水艦長であったといういかめしさはなく、温厚な、思いやりに溢れた人柄の司令で大声で怒鳴ることは一度もなかったのです。

松浦では、約二カ月間「水の子灯台」を中心にしての襲撃訓練ばかりでしたが、ある日、午前中の訓練を終えて、昼食後の休憩をしていると、佐伯航空隊に敵機の空襲があり、それについてきた戦闘機が松浦にまで機銃掃射を浴びせて来ました。

標的を沈めてはならぬ。我々は浜に走り出し通船に飛び乗りブイまで必死に漕いで標的にとび移ると湾口へ向けて突っ走り、急速潜航し、沈座して時を待ちました。海底に落ち着くとやっとほっ

とし、艇員と顔を見合わせましたが敵空母は近くにいるので出撃の日も近いと思いますと、果たせるかな「急ぎ宿毛に回航し、魚雷を装填せよ」との指令があつたのです。

こうして第一〇二突撃隊本部は宿毛に移り、同時に大浦から別の艇も着き、軍医長、主計長以下の兵員も派遣され、宿毛湾の一隅、深浦に小さい基地隊が出来上がりました。そして我々は交替で当直につき、出撃の日を待ったのです。

八月十五日の終戦の日には、直井艇長は当直将校で、正午の玉音放送十五分前に集合のこと、ラジオの整備をさせる等の手筈を整えました。その玉音放送が終わって、司令は「別命あるまで待機せよ」と言いましたが、本部には沈痛な空気が漂いましたが、いきりたつ者はいませんでした。

部隊は解散し、大浦に戻る最後の航海はイルカとたわむれながらのんびりしていました。そして大浦につくと直ぐ魚雷を抜きました。そして各艇を呉のドックに引き渡せということで私たちは充

電し、新しい搭乗服に着替え、最後の航海となるであろう音戸の瀬戸に向いました。

こうして私たちの標的乗りの生活は音戸の瀬戸を通った日から始まり、そしてまた、音戸の瀬戸で終わろうとしているのです。

いつものように渦をまいて流れている潮のど真ん中を艇は滑るように走り抜けると、標的の墓場が待つていました。それは墓場と言うにふさわしく、小さなドックにはすでに二十隻ほどの標的が集められ、六〇五号はその隙間へゆつくりと入り、後進、そして次の「停止」の号令をもってこの艇の一切の動きが止まったのです。

### 【解 説】

体験記筆者は、昭和十七年五月呉海兵団に入団、航空母艦「瑞鶴」に乗り込んで第二次ソロモン海戦を体験、以後、工機学校、潜水学校を卒業して特殊潜航艇(甲標的)乗組員となって訓練を受け、終戦近くに第一突撃隊員として特潜基地・宿毛に

あつて終戦を迎える。

記録にもあるように、筆者は予備学生出身の直井中尉を艇長とする六〇五号乗り組みとなり、艇員五人の人間味ある結束の下で、特攻兵器ともいわれた特殊潜航艇「蛟龍」での訓練状況でした。

直井時雄艇長の「九桜記」にもあるように、直井艇長が四人の艇員を紹介する中で、最も「頼りになる大久保一機曹」と記してあるように、解説取材に伺った折の、その大久保さんの語りの中には、海軍兵曹として鍛え抜かれた最も頼りになる海軍下士官の姿がありました。

現在、筆者は「特殊潜航艇水蛟会事務局長」をされています。そして真珠湾攻撃に始まった特殊潜航艇の戦果と艇員たちの顕影、冥福を祈っておられるという。

過日、NHKが放映した真珠湾攻撃の記録の中で、奇襲攻撃した航空部隊の戦果を語るだけでは、事実と反していると、NHKに抗議されたという。

「真珠湾攻撃は特殊潜航艇を語らなくては事実

ではない。五つの艇に十人の勇士が行っている」と強調された姿は、特殊潜航艇という限られた空間で訓練を受け、人間同志が信頼し合つて培った闘魂を感じずにはいられない。

直井艇長の書かれた「九桜記」、その他数冊の参考資料、図書をお借りしましたが、今もって当時の闘魂を持つて戦後に語り続けられている大久保さんのお姿がまだ脳裏に焼きついています。